CLASSICS

Oskar Merikanto
Yksinlauluja

Hiroyuki Suzuki, baritoni
Hiroto Tamada, piano

NIKU-9065

Oskar Merikanto (1868-1924) オスカル・メリカント歌曲集

Yksinlauluja

1 **Pai, pai, paitaressu,** op. 2, nro 1 **ねんねん坊や**(1887) [2'24"]
Jooseppi Mustakallio ヨーセッピ・ムスタカッリオ

2 **Muistellessa,** op. 11, nro 2 **思い出すとき**(1891) [3'41"]
J. H. Erkko J.H. エルッコ

3 **Reppurin laulu,** op. 14, nro 10 **行商人の歌**(1900) [3'28"]
Larin-Kyösti/käännös karjalan murteelle:Iivo Härkönen
ラリン・キヨスティ／カレリア方言訳詩：イーヴォ・ハルコネン

4 **Kun saapuu Herra Zebaoth,** op. 17 **万軍の主ゼバオトがやってくるとき**(1899) [5'16"]
Eino Leino エイノ・レイノ

5 **Kullan murunen,** op. 20, nro 1 **金のかけら**(1891) [1'40"]
J. H. Erkko J.H. エルッコ

6 **Miksi laulan,** op. 20, nro 2 **なぜに私は歌う**(1894?) [1'13"]
J. H. Erkko J.H. エルッコ

7 **Kun päivä paistaa,** op. 24, nro 1 **陽が輝くとき**(1897) [1'59"]
Hilja Haahti ヒルヤ・ハーフティ

8 **Myrskylintu,** op. 30, nro 4 **嵐の鳥(フルマカモメ)**(1901) [3'18"]
Kasimir Leino カシミール・レイノ

9 **Soi vienosti murheeni soitto,** op. 36, nro 3 **柔らかく響け、我が悲しみの調べ**(1899) [1'53"]
Heikki Ansa ヘイッキ・アンサ

10 **Rukous (Ave Maria),** op. 40, nro 2 **祈り(アヴェ・マリア)**(1900) [2'43"]
Juhani Sjöström ユハニ・シェストレム

11 **Kuin hiipuva hiillos tummentuu,** op. 47, nro 2 **火が消え入るように**(1902) [1'38"]
Severi Nuormaa セヴェリ・ヌオルマー

12 **Merellä,** op. 47, nro 4　**海にて**(1891)　[4'21"]

J. H. Erkko　J.H. エルッコ

13 **Linnulle kirkkomaalla,** op. 52, nro 2　**墓地の小鳥へ**(1905)　[1'43"]

Eino Leino　エイノ・レイノ

14 **Omenankukat,** op. 53, nro 1　**林檎の花**(1905)　[1'16"]

Eino Leino　エイノ・レイノ

15 **Illansuussa,** op. 69, nro 2　**宵の口**(1908)　[2'18"]

V. A. Koskenniemi　V.A. コスケンニエミ

16 **Ma elän!,** op. 71, nro 1　**私は生きている!**(1908)　[1'22"]

Larin-Kyösti　ラリン・キヨスティ

Haudoilta-sarja, op. 74　**歌曲集《墓場から》**(1911)

Lauri Pohjanpää　ラウリ・ポホヤンパー

17 **I.　Valkeat ristit　白い十字架**　[3'29"]
18 **II.　Laulaja taivaan portilla　天の門の歌うたい**　[1'35"]
19 **III. Käy kirkkomaata illoin vanhat mummot　老婆たちは夜ごと墓地を訪れる**　[4'08"]
20 **IV. Päivännousu kultaa kirkkomaan　朝日が墓地を金色に染める**　[1'54"]

21 **Hyvää yötä,** op. 75, nro 1　**おやすみ**(1911)　[2'56"]

L. Onerva　L. オネルヴァ

22 **Laatokka,** op. 83, nro 1　**ラドガ湖**(1913)　[3'27"]

Mikko Uotinen　ミッコ・ウオティネン

23 **Elämälle!,** op. 93, nro 4　**人生に!**(1916)　[2'28"]

Ernst V. Knape/suomennos:Jussi Snellman
エルンスト V. クナペ／フィンランド語訳詩：ユッシ・スネルマン

24 **Iltakellot,** op. 106, nro 1　**夕べの鐘**(1919)　[2'29"]

Verneri Liinamaa　ヴェルネリ・リーナマー

Total playing time [64'05"]

Hiroyuki Suzuki, baritoni 鈴木啓之（バリトン）　**Hiroto Tamada, piano** 玉田裕人（ピアノ）

オスカル・メリカント

世代を超えた人気を誇る作曲家

Oskar Merikanto
オスカル・メリカント
Sibelius-museo, Turku, Finland
シベリウス博物館 トゥルク フィンランド

オスカル・メリカント Oskar Merikanto (1868-1924) は、同時代のフィンランドの作曲家の中でも、さまざまな意味で特別な人気を誇っているといえよう。ジャン・シベリウス Jean Sibelius (1865-1957) は国際的に最も愛されてきたフィンランドの作曲家ではあるが、フィンランド国内ではメリカントの方が友人であるシベリウスよりも人気があり、よく知られた作曲家であった。メリカントの人気には二つの大きな理由があった。第一に、メリカントは母語としてフィンランド語を話し、当時はスウェーデン語系のシベリウスよりも「フィンランド的」な作曲家だとされていたこと。第二に、メリカントはピアノ曲や歌曲といった小規模な作品を数多く書いており、当時のフィンランド国民にはオーケストラの曲よりも強くアピールできたという点である。特に彼の歌曲は後世にまで広く親しまれている。

メリカントがヘルシンキで生まれた1868年当時はフィンランドのクラシック音楽やコンサー

ト文化は形成されつつある段階で、フィンランドの音楽家や作曲家は海外、特に中央ヨーロッパに留学するのが一般的だった。メリカントも1887年から1892年までドイツに留学し、中でもシベリウスなどを教えたアルベルト・ベッカー Albert Becker (1834-1889) に師事した。そしてフィンランドに戻ると、現在でもヘルシンキで人気のある観光スポットの聖ヨハネ教会のオルガニストに任命され、亡くなるまでその職にあった。

今日、メリカントは主に作曲家として知られているが、実際にはピアニスト、オルガン奏者、教師、批評家、コンサート主催者として当時の音楽文化に大きな影響を与えていた。彼は当時フィンランドの音楽生活で起こったほとんどすべてに関与していたとさえいわれているが、これは決して誇張ではない。

まずメリカントはたいへん人気のあるオルガン奏者だった。彼のコンサートには2,000人もの聴衆が集まることもあり、これは人口が少なく、集落が点在していたフィンランドではとてつもない数であった。彼はまたオルガンの教則本を何冊も出版し、教会に設置された新しいオルガンをチェックするためにフィンランド各地を巡り歩きもしたが、メリカントのお墨付きを得ることは、その教会にとってしばしば大きな誇りであった。第二にメリカントはコンサート・ピアニスト、ピアノ教師としても全国的に人気があった。第三に彼は活発でどちらかというと辛口の音楽評論家として知られ、フィンランド国内のコンサートを熱心に批評していた。第四に1911年にフィンランド初のオペラハウスであるフィンランド・オペラ (現フィンランド国立オペラおよびバレエ) の設立にも参与し、以来その指揮者を務めた。

他のすべての活動に加えて、メリカントが作曲を続けたことは奇跡だとも言える。メリカントは声楽や器楽の分野で幅広く実験を行った。作曲家としてのメリカントはフィンラン

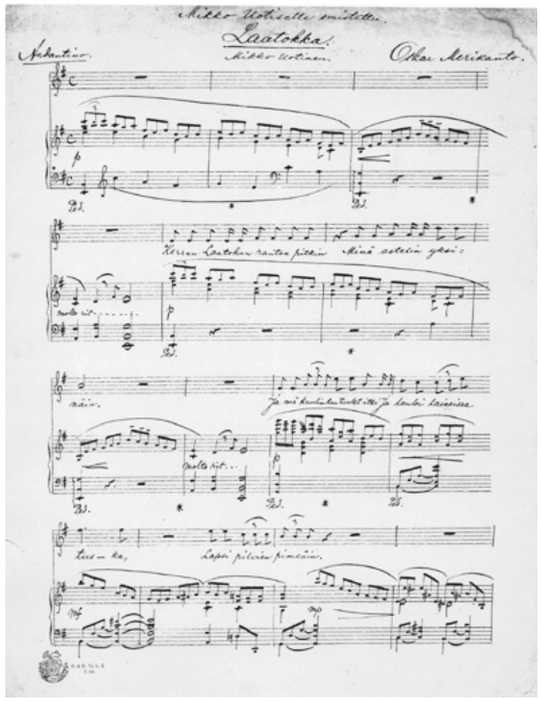
ドで注目に値するパイオニアであり、オペラの分野ではフィンランド語初のオペラ「北の乙女 Pohjan neiti, OM206 (1898)」を作曲してもいる。メリカントが舞台やオーケストラのための音楽も数多く作曲していることを知っているフィンランド人は少ない。また、これらの作品が今日演奏されることはほとんどなく、メリカントの存命中にも特別な賞賛や評価を受けることはなかった。その代わりに、メリカントの作品の中で強く生き残っているのはピアノ曲と声楽曲の二つの分野である。

実際に今日でもメリカントのピアノ曲「ゆったりとしたワルツ Valse lente, op. 33 (1898)」と「夏の夕べのワルツ Kesäillan valssi, op. 1 (1885)」を知らないフィンランド人はいないと言ってよいほどである。特に後者はメリカントがわずか17歳のときに作曲したもので、生前すでにある意味でのヒット曲となっていた。そしてコンサートを行うとメリカントはしばしばこの曲の演奏を依頼された。しかしあまりの依頼の多さにまもなく彼はこの曲を作曲したこと自体を後悔し始めるほどであった。

メリカントは何よりもその歌曲作品で知られ、記憶されている。実際、メリカントの歌を聴いたことのないフィンランド人など想像もできないほどである。たとえすべてのフィンランド人がメリカントの歌について作曲者の名前を言えるわけではないとしても「ねんねん坊や Pai, pai, paitaressu, op. 2, nro 1 (1887)」や「丘陵の夕べ Ilta tuntureilla, op. 18, nro 2 (1897)」のようないくつかの歌はフィンランド文化の一部として今日まで残っている。この意味でメリカントは「現代フィンランド民謡」の生みの親であり、日本でいえば滝廉太郎や山田耕筰のような存在といえる。フィンランドでは2001年以降メリカント声楽コンクール (MERIKANTO-LAULUKILPAILU) が開かれ、オスカル・メリカントとその息子で革新的なモダニスト作曲家であったアーッレ・メリカント Aarre Merikanto

（1893-1958）の曲が演奏されている。

メリカントの歌曲の人気はその数の多さと、多彩で豊かな表現力から容易に理解できる。それらにはフィンランドの大衆にアピールする神秘的な憂愁が含まれていることが多いが、一方ではまた溢れ出るような生きる喜びも印象的である。またメリカントはメロディセンスに優れているので、彼の歌はピアノなしでもフィンランドの詩にたいへん自然に適合する。しかしながらやはり作品はピアノパートがあってこそ、その真価を発揮する。優れたピアニストであったメリカントはピアノ曲の要求するところをこの上なくよく理解しており、彼の作った歌曲ではピアノと声楽パートが自然に溶け合い、歌詞の雰囲気や内容が表現されるのである。



Laatokka　ラドガ胡

こうした特徴は、メリカントの没後100年を記念してリリースされたこのディスクに収められた作品にも当てはまる。メリカントの音楽はフィンランドにおいて特別な地位を占めているが、彼の歌は普遍的な魅力も持っていると私は信じている。それは作品がいかに今日まで生き続け、広がり続けていることか、そして地球の反対側の日本でさえそうであることが物語っている。

ラッセ・レヘトネン Lasse Lehtonen (音楽学/the Finnish Music Quarterly 編集長)
日本語訳／大倉純一郎

歌詞・対訳

1 **Pai, pai, paitaressu,** op. 2, nro 1

Jooseppi Mustakallio

Pai, pai, paitaressu,
kääry pieni kätkyessä,
tukku tuutussa tupukka!
Sua souan suositellen,
sylitellen sylkyttelen;
vaan en susien suloksi,
enkä ilvesten iloksi,
kontion kotihyväksi.
Souan Suomeni suloksi,
itseni iki-iloksi,
koko maani maireheksi.
Pai, pai, paitaressu,
tukku tuutussa tupukka!

ねんねん坊や

ヨーセッピ・ムスタカッリオ

ねん ねん 坊や
坊やはゆりかごで包まれて
ゆらり 揺れる 小さな子！
私が大事に揺らしましょう
私が抱いて揺らしましょう
狼の楽しみにではなく
山猫の慰みにでもなく
熊の遊び相手にでもなく
スオミ※の栄光のために揺らしましょう
私自身の楽しみのために
国の名誉のために
ねん ねん 坊や
ゆらり 揺れる 小さな子!

※ スオミ＝フィンランド

2 **Muistellessa,** op. 11, nro 2

J. H. Erkko

Maailman pauhinassa sinutko unhotan?
Sinua muistellessa unhotan maailman.

Sinua muistellessa mieleni rauhoittuu.
Maailma pauhatkoonkin, mieleni rauhoittuu.

Kuvasi sydämmeeni suloa ammentaa,
kuvasi mielestäni pahuudet kukistaa.

Sinua muistellessa katselen taivaaseen,
tarkastan kotijärven tyynehen syvyyteen.

思い出すとき

J.H. エルッコ

混沌たる世界で 私はあなたのことを忘れるのだろうか?
あなたを思い出すとき 私は世界のことを忘れる

あなたを思い出すとき 私の心は休まる
世界よ 混沌たれ 私の心は休まる

あなたの面影は 私の胸に優しさをもたらす
あなたの面影は 私の心から邪悪なものを取り去る

あなたを思い出すとき 私は空を眺める
ふるさとの湖の 穏やかな深みに心が馳せる

3 **Reppurin laulu,** op. 14, nro 10

Larin-Kyösti
käännös karjalan murteelle: Iivo Härkönen

Luadogan meren randamil
mie kazvoin kaukobriha,
siel mie paimoivirzie lauloin,
nyt eis on mieron piha.
Karjalan mail kuldakägözet kukkuu,
kirikön ristat kiildelöö,
taljankka illoin tanssiloih kuttsuu,
kannel hembieh helizöö.

Siel on kallis kandajain,
siel mielitiettyni tsoma,
kyläh kegri-illatsuis
on muttsoi otettu oma.
Karjalan mail...

Kierdelin, da kierdelin,
on selgä sumtsan painos,
mieroh matka mielenibä
omah kodih on ainos.
Karjalan mail...

行商人の歌

ラリン・キヨスティ
カレリア方言訳詩：イーヴォ・ハルコネン

ラドガ湖の岸辺で
私は立派な若者に成長した
そこで私は 牛追いの歌を歌った
しかし私の家は 今は見知らぬ人の庭
カレリアの地では 黄金のカッコウが鳴いている
教会の十字架が光っている
夜ごと 風琴がダンスに誘う
カンテレ※が優しく響く

そこには大切な母親がいる
そして私の愛する恋人が
村の万聖節の前夜祭
彼女は母親の元からやって来た
カレリアの地では...

私は歩きまわる 私は歩きまわる
重い荷物を背負って
心の中で帰り着くところは
いつも我が故郷
カレリアの地では...

※ フィンランドの民族楽器

4 **Kun saapuu Herra Zebaoth,** op. 17

Eino Leino

Kun saapuu Herra Zebaoth,
maan kruunut, vallat vaviskoot,
hän oikeuden Herra on
ja kantaa kalpaa tuomion.

万軍の主ゼバオトがやってくるとき

エイノ・レイノ

ゼバオト 国の王よ
あなたがやってくるとき その力に恐れ戦く
あなたは権利の主
そして裁きの剣を持つ

On maassa paljon murhetta.
Oi, kuule kansas huutoa!
Sun sanahas me luotamme,
ei koskaan, koskaan järky se.

おお、あなたの民の叫びを聞け！
我々はあなたの言葉を信じる
決して 決して揺らぐことはない
おお聞け あなたの民の叫びを

5 **Kullan murunen,** op. 20, nro 1

J. H. Erkko

Sinä kullan murunen,
kullan puhtahimman.
Minä vasken palanen,
vasken ruosteisimman.
Minä kultahan kun sulan,
vältän ruostumisen pulan.

金のかけら

J.H. エルッコ

あなたは金のかけら
それも最も純粋な金
私は銅の破片
それも最も錆びた銅
私が金の中に融けるとき
もう二度と錆びることはない

6 **Miksi laulan,** op. 20, nro 2

J. H. Erkko

En tiedä miksi laulaa lintunen
ja miksi jyräjääpi ukkonen,
vaan itse tiedän siksi laulavani,
kun sävelehet soivat rinnassani.

Jo tiedän miksi laulaa lintuset:
kun heissäkin soi kevättoivehet,
ja ukonjyrinässä vuorostansa
taas luonto purkaa sydäntuskiansa.

Niin mielessäni vaihtuu tuntehet,
kuin taivaan tähdet, meren aaltoset,
ne säveliä luovat rintahani:
ja siksi juuri tiedän laulavani!

なぜに私は歌う

J.H. エルッコ

なぜ小鳥が歌うのか 私にはわからない
なぜ雷が轟き渡るのか わからない
ただ私は歌うことを知っている
心の中に調べが湧き出でるとき

いまや私は知っている なぜ小鳥が歌うのかを
彼らもまた春の訪れを待ち侘びて歌う
そして雷が轟く季節
再び自然が心の痛みに火を付ける

私の気持ちは移りゆく
空の星のように 海の波のように
その調べは私の胸を打つ
そして今 私は知っている なぜ私は歌うのかを

7 **Kun päivä paistaa,** op. 24, nro 1

Hilja Haahti

Päivyt, paistaos hellien,
Pohjan kylmälle hangellen!
Kukat vielä on uinumassa,
aalto jäisessä vankilassa:
vaan sun lämpöinen sätehes
mulle kertovi terveises:
kohta poissa on nietos, jää,
kohta koittavi kevätsää.

Päivyt, paistaos hellien,
paista Suomeni korpehen!
Miss' on puute ja murhe musta,
sinne saattaos lohdutusta!
Kerro lämpimin sätehin:
päättyy huolien talvikin.
Toivo, Luojahan luota vaan,
kevät koittavi aikanaan!

陽が輝くとき

ヒルヤ・ハーフティ

太陽よ やさしく輝け
北国の雪原の上に!
花たちはまだ深い眠りの中
波は氷の中にとじこめられている
あなたの温かい光だけが
私に挨拶を送る
やがて流氷も消え去り
やがて春の日々がやってくる

太陽よ やさしく輝け
我がスオミの森に 陽を降りそそげ！
求めている処へ そして悲しみの処へ
あなたはやすらぎをもたらす！
暖かい光で告げて下さい
不安の冬でさえ 終わりを告げる
神に望みを託しなさい
春は確実にやってくる！

8 **Myrskylintu,** op. 30, nro 4

Kasimir Leino

Kun myrsky mylvii ja laine laulaa
ja vasten louhia loiskuaa,
kun honka huojuu ja näre notkuu
ja vahto pärskyen roiskuaa.
Mä silloin nautin ja riemurinnoin
mä halki ilmojen kiitelen
ja laulan luontoa, maailmoita
ja elon taistoa ihmisten.

嵐の鳥（フルマカモメ）

カシミール・レイノ

嵐は唸り 波は歌い
岩に波飛沫が上がる時
年老いた松の木は揺れ 若いエゾ松は曲がり
波飛沫が跳ね上がる時
その時私は至上の喜びに浸る
私は大気を貫いて飛ぶ
そして歌う 自然を 世界を
人の生命の戦いを

Kun viima vinkuu ja mastot laulaa
ja laivan touvissa tuuli soi,
kas silloin kuoroon mä myöskin yhdyn,
ja myrsky säistäen mellakoi.
Tuo myrsky poistavi mustat pilvet,
ja taivon siintävän seijastaa,
ja ilma muuttuu ja tuuli tyyntyy
ja meri rantoja heijastaa.

On muiden mielehen luonto tyyni,
ja leivon laulu ja illansuu,
ma nautin parhain kun myrsky pauhaa,
kas silloin nuortuu ja norjistuu.
Siis vello vahtoa aallon Ahti
ja sävel soios sä myrskysään!
Mä lennän laulaen ilman halki
ja kiidän kilvalla tuulispään!

強い風が吹き抜け マストが歌い
港の舟が風に鳴る時
その時私はこの歌声と一体になる
そして嵐がその伴奏を奏でる
やがて嵐は黒い雲を運び去り
空は蒼く澄み渡る
そして天気は変わり 風は和らぎ
海は岸辺を映し出す

人は穏やかな自然を好む
そして雲雀が歌う宵の口を
しかし私は嵐が咆哮する時 至上の喜びを感じる
それは私に若さと強さを与える
波の神がうねりを呼び
嵐の中で調べが響く
私は大気を貫き 歌いながら羽ばたく
そして疾風と楽しみながら競い合う

9 **Soi vienosti murheeni soitto,** op. 36, nro 3

Heikki Ansa

Kun ärjyivät rannan hyrskyt,
niin kantelo vienosti soi,
kun ulvoivat syksyn myrskyt,
se kevättä rintahan toi:

Vei maailma riemuni soiton
ja rintani rauhan se vei.
Ja jos vieläkin kantelo kaikaa,
niin iloa kaiu se ei.

柔らかく響け、我が悲しみの調べ

ヘイッキ・アンサ

大波が 岸に打ち寄せる時
カンテレが柔らかく響く
秋の嵐が猛り狂うとき
それは心に春を運んでくる

世界は我が喜びの調べを取り去った
我が心の安らぎを取り去った
そしてもし今なおカンテレが鳴り響くなら
それは楽しげに響きはしない

Soi vienosti murheeni soitto,
soi hellästi kaihoni, soi!
Mut hellimmin helise hälle,
joka murheen mun rintaani toi.

柔らかく響け 我が悲しみの調べ
優しく響け 我があこがれよ!
しかし最もやさしく彼女に響くとき
それは我が心に悲しみをもたらす

10 **Rukous (Ave Maria),** op. 40, nro 2

Juhani Sjöström

Neitsyt Maria emonen,
rakas äiti armollinen,
muista sorretun surua,
huolellisen huokumia.
Pyhä neitsyt miut pelasta,
armosi yletä miulle,
oma Poikasi lepytä,
hyvitä se hyljätylle,
minulle mitättömälle,
päästäjäksi tuiman tuskan.
Armottasi olen orpo,
synnissä kauan elänyt,
neitsyytesi, nuoruutesi,
kaikkivallan kauneutesi
kautta auta, auta minua,
auta, auta minua,
neitsyt, neitsyt Maria,
auta, auta minua!

祈り（アヴェ・マリア）

ユハニ・シェストレム

聖なる乙女 母なるマリアよ
慈悲深き 愛する母よ
憶えていてください 打ちひしがれた悲しみを
悩める心のため息を
聖なる乙女よ 私をお救いください
恵みの手をさしのべてください
あなたの御子よ 心を静めてください
見捨てられたものに
私のように取るに足らないものに
私の無残な苦しみを終えるために
あなたの慈悲なくしては 私は孤児
罪のうちに生き長らえるばかり
あなたの純潔によって 若さによって
全能の美によって
お救いください 私をお救いください
お救いください 私をお救いください
聖母よ 聖母マリアよ
お救いください 私をお救いください！

11 **Kuin hiipuva hiillos tummentuu,** op. 47, nro 2

Severi Nuormaa

Kuin hiipuva hiillos tummentuu,
kun tuli sen tuhkaksi söi,
kuin iltakellon helkähdys haipuu pois,
kun se kerran viimeisen löi,
niin kerran kait ne taistotkin tummuu pois,
jotka tunnetta tulena söi,
ja se sydän niin hiljaan sammahtaa,
joka liekitsi liioin ja löi.

火が消え入るように

セヴェリ・ヌオルマー

火が消え入り 暗くなるように
炎がそれを灰にしてしまったとき
夜の鐘の音が響き 消え行くように
最後の一回が鳴ったとき
戦いもやがて終わりになるだろう
戦いは 火が消え入るように 心を滅入らせた
そして心は静かに終息を迎えた
かつては盛んに燃え 高鳴ったあの心が

12 **Merellä,** op. 47, nro 4

J. H. Erkko

Syvästi meri huokaa,
sen rinta kuohuaa.
Mut rauhallisna taivas
valoa vuodattaa.

Min' olen meri, minä,
levoton, aaltoinen.
Sin olet taivahani,
valoisa, rauhainen.

Kuvasi, armas, kannan
nyt vasten rintoain
ja sinut itses kätken
syvällä sielussain.

Voi laivan myrsky murtaa
ja kenties uppoan,
mut sinut sielussani
vien aallon pohjahan.

海にて

J.H. エルッコ

海は深く苦悶する
その胸は沸き立つ
しかし大気は静まり
光を放つ

私は海
休みなく波立つ
あなたは空
明るく静まり返る

恋人よ あなたの面影を持ち歩く
今も私の胸に
あなたは焼き付いている
私の胸の奥深く

嵐が舟を襲い
もし私が波間に消えたとしても
私の心の中のあなたを
波の底につれて行く

13 **Linnulle kirkkomaalla,** op. 52, nro 2

Eino Leino

Lintunen lehdossa kirkkomaan,
laula, laulele virkku,
laula mulle ja laula muille,
taivaan tuulille, metsän puille,
kuolema kulkee kulkuaan,
soita, sirkuta sirkku!

Laula mun lauluni lintunen,
viel' älä vallaton vaikee,
laula haudoilla haaveiden,
viritä virsiä nuoruuden,
Suomi on suuri kirkkomaa,
mieleni minun on haikee.

Kun minä kuulen sun lauluas,
silloin mun kesäni kerkee,
silloin mun murheeni unhottuu,
saapuvi jällehen kukkain kuu,
helise, unteni harppu, oi,
heläjä, elkösi herkee!

墓地の小鳥へ

エイノ・レイノ

墓地の茂みの中の小鳥よ
歌っておくれ 元気に歌っておくれ
歌っておくれ 私のために そして他の人々のためにも
空の風に そして森の木々にも
死はさまよい歩く
小さき鳥よ 奏でておくれ 囀っておくれ！

小鳥よ 私の歌を歌っておくれ
いつかやめてしまうことの無いように
歌っておくれ希望につながる墓場で
若き日の讃歌を呼び覚ましていておくれ
スオミは偉大なる墓地
私の心はうら悲しい

私があなたの歌を聴くとき
その時 私の夏は足早にやってくる
その時 私の悲しみは忘れ去られる
そして再び花咲くときがやってくる
おお竪琴よ 私の夢をかき鳴らしておくれ
とどまることなく響いておくれ！

14 **Omenankukat,** op. 53, nro 1

Eino Leino

Mun onneni kukkii kuin omenapuu
kevätöissä valoisissa,
kun kuusten latvat ne kumartuu
ja immet on unelmissa.
Ne yöt pari ympäri helluntain
ne yöt on suuret ja syvät,
ja silloin jos ei tule tuuli vain,

林檎の花

エイノ・レイノ

私の幸福が 林檎の木のように花咲いた
明るい春の日の宵に
樅の木の梢が曲がる時
乙女たちは夢の中
聖霊降臨祭の頃の宵
偉大なそして深い宵
そしてその時 風が吹かなければ

niin kypsyvät heelmät hyvät.
Oi, antaos taivas tyyntä nyt,
jos sitten sä annatkin muuta!
Oi, varjele Luojani vakainen
nyt orvon omenapuuta!

果実はよく実るだろう
おお 天よ 穏やかな日を与えてください
その後どのような日々が来ようとも！
おお 神よ お守りください
しっかり根を下ろした 寄る辺なき子の林檎の木を！

15 **Illansuussa,** op. 69, nro 2

V. A. Koskenniemi

Nyt saapuu kaihonsairas illansuu,
nyt aukee satusaaret suuret, aavat,
nyt hämyn henget karkeloihin saavat
ja taivas kuumehisna punertuu.

Nyt työ ja taisto yöhön unhoittuu,
nyt raukee arkielon mittakaavat,
nyt aukee kaikki vanhat sydänhaavat
ja kaihon mereen mieli uppouu.

宵の口

V.A. コスケンニエミ

今 郷愁漂う宵の口がやってくる
今 お伽の島が大きく開いている
今 夕暮れの精神が戯れながらやってくる
そして空は燃えるように赤くなる

今 仕事も戦いも夜の中に忘れ去られる
今 日々の腐心も消えてゆく
今 再び心の古傷が口を開ける
そして想いも郷愁の海へと沈む

16 **Ma elän!,** op. 71, nro 1

Larin-Kyösti

Ma elän, ah, mikä riemu,
mikä riemu ja soitto nyt suonissa soi,
näin sydän ei koskaan oo sykkinyt,
mikä loisto ja hehku mun täyttää nyt,
ma laulan, ma laulan, ma laulan,
sillä Luoja mun laulamaan loi!

Ma voisin jo olla vainaa,
alla kalman kukkain ja tumman yön,
ei, ei, minä elän, ma tunnen sen,
kuinka sieluni kasvaa kamppaillen
kohti tähtiä kautta korkean työn!

私は生きている！

ラリン・キヨスティ

私は生きている おお 何という喜びよ
私の血管の中で響いているのは 何という喜び 何という調べ
私の胸は かつて無いほど高鳴る
いかなる煌めきと喜びの輝きが 私を満たしているのか
私は歌う 私は歌う 私は歌う
なぜなら主が私を歌へと導くから！

私は既に死んでいるのかもしれない
墓地の花の下に そして暗い夜の下に
いや いや 私は生きている 私はそれを感じる
試練を経て いかに私の魂は育つのか
星に向かって そして高貴な仕事を通して！

Ma elän, ma elän, ma elän!
Sulle, elämä, korkein lauluni soi!
Pyhä kevät mun henkeni kruunatkoon,
taas elämän nuori kuningas oon,
ma laulan, ma laulan, ma laulan,
sillä Luoja mun laulamaan loi!

私は生きている 生きている 生きている
人生よ あなたのために最も高貴な私の調べが響く
神聖な春が私の精神を讃える
そして再び私は人生の若き支配者になる
私は歌う 私は歌う 私は歌う
なぜなら 主が私を歌へと導くから！

Haudoilta-sarja, op.74

Lauri Pohjanpää

歌曲集 《墓場から》

ラウリ・ポホヤンパー

17 I. Valkeat ristit

Valkeat ristit vihreillä kummuilla,
kasteessa terät nuorilla ummuilla.

Täällä arkiset aatokset hukkuvat.
Täällä isien henget nukkuvat,

jotka on meille elämän antaneet,
ennen meitä murheita kantaneet,

jotka nyt kauan on rauhassa maannehet,
joitten on taistelut voittohon laannehet.

Hautoja siunaten tuuli haviskoon.
Pyhää hartautta sieluni vaviskoon.

1. 白い十字架

白い十字架が緑の丘の上に立っている
露に濡れた若い花が生き生きとしている

ここでは日常の思考が消えゆく
ここに父たちの魂が眠っている

それらは私たちに命を与えてくれた
我々以前に悲しみを担う

それらはいま平穏な国で休息している
その戦いは勝利に終わっている

祝福の風が墓にそよぎますように
私の魂が聖なる帰依に打ち震えますように

18 II. Laulaja taivaan portilla

Olen kuolleen laulajan sielu,
tulen kaukaa päältä maan,
ei mulla onnea ollut,
oli ihana kaipaus vaan.

2. 天の門の歌うたい

私は 死んだ歌うたいの魂
遠く地上からやって来た
何も幸せはなかった
あったのは 素晴らしい憧れだけ

Olen katsonut silmäni sokeiks
unelmaini kirkkauteen,
en onnea pyydä, mut unet
suo nähdä mun uudelleen.

私は目を閉ざした
夢の輝きを見つめながら
私は幸せを望まない しかし夢を
そんな夢をもう一度見たい

19 III. Käy kirkkomaata illoin vanhat mummot

Käy kirkkomaata illoin vanhat mummot
ja myssyin alta välkkyy valkohapset
he tulee toivottamaan hyvää yötä:
kas täällä nukkuu lapset, lastenlapset.

He kaikista on yksin eloon jääneet,
he itkeneet on paljon kyyneleitä,
nyt surunsa jo ovat ammoin laanneet,
nyt pyhä, kirkas rauha varjoo heitä.

He tulee mustissansa joka ilta
ja vapisevin käsin portin avaa
ja käyvät hiljaksensa hautain keskeen
ja muistokirjoitukset lasten tavaa.

Ja uudestaan ja yhä uudestansa
he muistelevat läpi elämänsä.
He niitä, jotka nyt jo ovat täällä,
on kerran sylkytelleet sylissänsä.

On kaikki hyvin, hekin kohta lähtee,
jo nukkuu lapset sekä lastenlapset.
Käy hiljaa päätä nyökkäin vanhat mummot
ja myssyin alta välkkyy valkohapset.

3. 老婆たちは夜ごと墓地を訪れる

老婆たちは夜ごと墓地を訪れる
帽子の下には白い髪がきらきらしている
彼らはおやすみを言うためにやってくる
そう ここには子供たちと孫たちが眠っている

すべてのものにそれぞれの生があった
彼らはたくさんの涙を流した
いま 彼らの悲しみは はるか昔に鎮まっている
いま 澄みきった聖なる平和に覆われている

黒い服を身にまとい夜ごとやってきて
震える手で門を開ける
ゆっくりと墓場の中にやってくる
そして子供たちの墓碑銘を刻む

そして再び さらにもう一度
彼らの人生を思い起こす
そしてそれぞれの子を
その腕に抱く

すべてがうまくゆき 彼らもやがて去ってゆく
子供たち 孫たちはすでに眠っている
静かに頭を動かしながら老婆たちは夜ごと墓地を訪れる
帽子の下には白い髪がきらきらしている

20 IV. Päivännousu kultaa kirkkomaan

Päivännousu kultaa kirkkomaan,
linnut havahtuvat unestaan,
katso, aamukaste haudoilla jo kiiltää.

Päivän hymyyn ummut aukeaa,
niinkuin vasta olis luotu maa,
katso, aamukaste haudoilla jo kiiltää,

niinkuin kuolo olis uni vaan,
elämä ei päättyis milloinkaan.
Katso, aamukaste haudoilla jo kiiltää.

Riemulla käy kohti kuolemaas,
kuolemasta nousee elo taas.
Katso, aamukaste haudoilla jo kiiltää,
aamukaste haudoilla jo kiiltää.

21 **Hyvää yötä,** op. 75, nro 1

L. Onerva

Saapuu hetki toivottuni,
lankee uupuneeseen silmään
kauan kangastellut uni.
Hyvät yöni heitän sulle.
Yöhön käyvän sielun tähti
viimeinen sa olit mulle.
Jo on hetki pilkkopimeen:
siunaan sydämesi suuren,
menen maata Herran nimeen.

4. 朝日が墓地を金色に染める

朝日が墓地を金色に染める
小鳥たちは夢から目覚める
見よ 朝露は墓地ですでに輝いている

日のほほえみは花々を目覚めさせる
あたかもいま世界が創り出されたように
見よ 朝露は墓地ですでに輝いている

あたかも死は夢に過ぎないように
人生は終わることはない
見よ 朝露は墓地ですでに輝いている

喜びのうちに死に向かう
死から再び生が始まる
見よ 朝露は墓地ですでに輝いている
朝露は墓地ですでに輝いている

おやすみ

L. オネルヴァ

私が望んだ時がやってくる
疲れ果てた瞳は落ちてゆく
長く待ちわびた眠りへと
我がすばらしき夜をあなたに
君は夜へと誘う
私の最後の星よ
すでに漆黒の時
私は偉大なる君の心を祝福する
私は眠りへと落ちる 神の御名の下に

22 **Laatokka,** op. 83, nro 1

Mikko Uotinen

Kerran Laatokan rantaa pitkin
minä astelin yksinäin.
Ja mä kuulin kun tuulet itki
ja lauloi laineissa tuska,
lapsi pilvien pimeäin.
Sinun laulusi mielehen mulle
tuskan ja toivon soi,
ristituulessa runnellulle
kansaraukalle kuohusi uljaat
aamuharppuna huminoi.

Oot, Laatokka, Karjalan povi,
joka kuohuvi tuskissaan.
Vaan lauluus ei kuolema sovi,
siinä nousevan leijonan ääni
soi kuningas unelmiaan.

ラドガ湖

ミッコ・ウオティネン

かつて ラドガ湖の岸辺を
私は独りそぞろ歩いた
そして私は風がすすり泣くのを聞き
苦痛が歌うのを聞いた
黒雲の子供よ
あなたの歌声は私の心に
苦痛と希望とをもたらす
行き交う激しい風が
貧しき民に襲いかかる中
それは夜明けの竪琴のように響く

ラドガ湖よ あなたはカレリアの心
苦痛のうちに泡立つ
死は決してあなたの歌にはふさわしくない
そこではいきり立つライオンの咆哮が
王の夢へと響き渡る

23 **Elämälle!,** op. 93, nro 4

Ernst V. Knape
suomennos:Jussi Snellman

Terve valtias valon ja yön!
Sä elon ja kuolon korkea kuningas,
täyttäjä työn.

Ei voittaa voi sua suurinkaan,
sinun virtes valtava kaikuu yli kuohuvan veen,
yli yöllisen maan.

人生に！

エルンスト V. クナペ
フィンランド語訳詞：ユッシ・スネルマン

ようこそ 光と夜の支配者!
あなたは生と死の気高き王
すばらしき遂行者

最も偉大なものでさえ あなたには勝てない
あなたの力強い讃歌は泡立つ水の上に響く
夜の帳が下りた大地の上に響く

Terve, kalman kaamea vuo,
täyttymys elämän tään,
mykkä myös tuonelan mahti,
sammunut, syttyvä tuike tuo!

Uus sukukunta, uudempi usko
nousevi nuorena vanhan taa.
Aamun enne on illan rusko.
Kuololta elämä kasvun saa.

Terve, valtias valkeuden, yön!
Sä elon ja kuolon korkea kuningas,
täyttäjä työn.

ようこそ 死の国の暗い流れよ
この人生を満たしている
黄泉の国の無言の力に
あの燃え上がる炎も消えてしまう！

新しい世代が より新しい信仰が
古いものを越えて新たに芽生える
やがて来る朝の前には夕焼けがある
人生は死を通して成長する

ようこそ 光の支配者 夜よ！
あなたは生と死の気高き王
すばらしき遂行者！

24 **Iltakellot,** op. 106, nro 1

Verneri Liinamaa

Angelus soi! Niin hellästi helisee kellot;
loppui jo päivän työ,
hiipien saapuu yö,
huntunsa peittäen pellot.

Angelus soi kuin laulelma lempeä lauha;
työn taakat kirposi jo,
on laskenut aurinko,
yllä maan on raukea rauha.

Angelus soi! Sen helinä hämyhyn haipuu;
yli maiseman uupuneen
uni hiipii hiljalleen
ja rauhaton rauhaan vaipuu.

夕べの鐘

ヴェルネリ・リーナマー

お告げの鐘が鳴る！ 本当に穏やかに鳴り響く
一日の仕事は終わり
夜が忍び寄る
畑は夜のヴェールに覆われる

お告げの鐘が鳴る 優しい愛の調べのように
仕事の重荷はすでに取り除かれた
陽は沈んだ
まどろみの平和が支配している

お告げの鐘が鳴る！ その響きは夕闇の中に消えゆく
枯渇した地を越え
夢は静かに忍び寄る
そして心の痛みは平穏の中へと沈みゆく

(対訳：谷口ひろゆき)

Hiroyuki Suzuki, baritoni
鈴木啓之　(バリトン)

© 濱中謙介

静岡県浜松市出身。信愛学園高等学校音楽科（現・浜松学芸高等学校音楽科）卒業。名古屋音楽大学音楽学部声楽学科卒業。同大学院音楽研究科声楽専攻修了。2008年から2013年フィンランドに留学。フィンランド・ヨーチェノ大学夏季マスタークラスにてディプロマ取得。

これまでに田代雅子、原田茂生、奥村晃平、Jorma Hynninen、Marja Holopainen-Tatenoの各氏に師事。第8回大阪国際音楽コンクール声楽部門歌曲コース第3位（最高位）を受賞。

オペラでは、「魔笛」（パパゲーノ）、「蝶々夫人」（シャープレス）、「カヴァレリア・ルスティカーナ」（アルフィオ）、「ディドとエネアス」（エネアス）、「カルメン」（ダン・カイロ、モラレス）、「天国と地獄」（ジュピター、マルス）、「アマールと三人の王様」（メルフィオール）、「泥棒とオールドミス」（ボブ）、「ヘンゼルとグレーテル」（ペーター）、「藤戸」（佐々木盛綱）などに主要キャストとして出演。

コンサートでは、「クッレルヴォ交響曲」、「メサイア」、「第九」などのソリストとして多くのオーケストラと共演。02年7月、04年4月、08年7月・8月、10年5月・10月、21年12月にソロ・リサイタルを開催。多くの公演にて日本初演作品を含むフィンランド歌曲の演奏を行い、好評を博している。ヘルシンキ大聖堂、テンペリアウキオ教会、ヘルシンキ自由教会、ミュルンマキ教会などフィンランド国内の教会での演奏も多く、フィンランド歌曲だけでなく宗教音楽にも造詣が深い。

在フィンランド日本国大使公邸での天皇誕生日祝賀レセプションにてフィンランド、日本両国歌の演奏や駐日フィンランド大使館での演奏など、フィンランドとのつながりが深い。また、近年フィンランド人詩人の邦訳詩に作曲を委嘱し、「日本語で聞けるフィンランドの歌」の演奏も行っている。

FMハロー「ふるさとサウンドライブラリー」、CBCラジオ「つボイノリオの聞けば聞くほど」、NHK BS1「地球アゴラ」などに出演。

日本シベリウス協会会員・運営委員、日本・フィンランド新音楽協会会員・運営委員、日本フィンランド協会会員、日本演奏連盟会員、東京二期会会員。

【オフィシャルウェブサイト】https://toivo-suomi.fi

Hiroto Tamada, piano
玉田裕人　(ピアノ)

愛知県名古屋市出身。名古屋音楽大学音楽学部器楽学科ピアノ専攻卒業、同大学大学院音楽研究科を首席で修了。

幼い頃から国内外の演奏会、コンクールに出演し、数々の受賞を重ねる。コンチェルトにおいては、黒岩英臣氏指揮／名古屋音楽大学卒業生オーケストラ、江田つかさ氏指揮／和歌山市交響楽団と共演。ウィーンにて、A.イエンナー氏のマスタークラス修了。ディプロマを取得。クロアチアにてK.ゲキチ氏のマスタークラスを修了しディプロマを取得するほか、首都ザグレブにてTV出演し、Zdravko Šljivac作曲のJesen – Zimaを生演奏で世界初演するなど、海外でも研鑽を積む。

2013年電気文化会館ザ・コンサートホールにて、日本演奏連盟の新進演奏家育成プロジェクトによるソロ・デビュー・リサイタルを開催。2018年しらかわホールにてソロ・リサイタルを開催。近年では、フィンランド大使館での演奏やCBCラジオ「つボイノリオの聞けば聞くほど」に出演。ソロはもとより、声楽、他楽器や合唱団のピアニストとしても精力的に活動すると共に、YAMAHAやKAWAI主催のレクチャーコンサートやアドバイスレッスン、ピアノコンクールの審査員を務めるなど、益々活躍の場を広げ、好評を得ている。

第2回ヨーロッパ国際コンクール in Japan・銀賞／審査員特別賞受賞。第31回飯塚新人音楽コンクール本選入選。第9回堺国際ピアノコンクールファイナリスト。コンサートグループ「花の詩」会員。これまでに、ピアノを山口望、竹中勇記彦、金山正一、平尾はるな、K.ゲキチの各氏に師事。室内楽を林俊昭氏に師事。チェンバロを中野振一郎氏に師事。

現在、愛知文教女子短期大学専任講師、名古屋音楽大学附属音楽アカデミー講師。

【オフィシャルウェブサイト】https://www.hirototamada.com

【Instagram】アカウント：tamachannnel

Recording: 28-30 November 2023, Yatsugatake Yamabiko Hall

Director & Engineer: Kotaro Yamanaka
Piano: Bösendorfer Model 290 Imperial
Piano Tuner: Kazuaki Kikuchi (B-tech Japan)
Digital Editing & Mastering: Kotaro Yamanaka
Liner Notes: Lasse Lehtonen
Translation (Liner Notes): Jun'ichiro Okura
Translation (Lyrics): Hiroyuki Taniguchi
Cover & Inlay Design: Yuta Koga
Photography: Kensuke Hamanaka
Costume Design: Akiue Go
Hair & Make-up: Kenta Kuroki